
あなたのパパ、わたしのパパ

伝説・改

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あなたのパパ、わたしのパパ

【Nコード】

N0849V

【作者名】

伝説・改

【あらすじ】

テレビに映る家族は、まさに絵にかいたような家族だ。幸せそのもので。笑顔が絶えなくて。そんな姿を見て、ヴィヴィオはあるひとつの疑問を抱く。

(前書き)

伝説

「物語の途中、あの人が出てます」

遼祐

「誰？」

伝説

「てめえだ畜生」

遼祐

「怒んなよ！自分で作ったんだろうが！」

伝説

「出すんならベレッタの方がまだよかったよ！」

遼祐

「なんだよそれええええ！！」

テレビに映る家族は、まさに絵にかいたような家族だ。
幸せそのもので。
笑顔が絶えなくて。
そんな姿を見て、ヴィヴィオはあるひとつの疑問を抱く。

「……パパ？」

パパ。

パパって、なんだろう。

ママは知ってる。なのはママとフェイトママの事。

じゃあパパは？

パパって、何？

「……パパ」

自分にとってのパパって、誰。
そんな事を思ったヴィヴィオは、今日の夕飯の時間になのはに聞い

てみる。

六課が解散して、なのはと二人で暮らしているが、多忙であるのはにこういう事を聞くチャンスが少ない。

だから、こうして面と向かって話せる夕食の時間に聞く事にしたのだ。

そして、帰ってきた答え。

「そうだなあ……」

なんだか、バツの悪そうな顔だった。
しばらくなのは考えて、やがて。

「ヴィヴィオがいい子にすれば、いつかきっと、パパが来るよ」

そっか。

来るといいなあ、パパ。

「そうだね。じゃあ、早くご飯食べてママといっしょにお風呂入って寝よっか」

「うん」

いつか来る。

そう信じて、ヴィヴィオはなのはが作った料理を再び口に運んだ。

ある日の事だった。

ヴィヴィオが通う学校が休みの日、なのはは仕事で家にいなかった。いつもの事なので、ヴィヴィオは気にしない。むしろ当たり前だと

思っている。

いつものように、家で時を過ごす。

そんな時。来客を告げるインターホンの音が、ヴィヴィオの耳に聞こえる。

「はーい」

お届けものかな？

そう思いながら、ヴィヴィオは玄関の扉を開く。
そこには。

「こんにちは、ヴィヴィオ」

「あ、ユーノさん」

ユーノ・スクライア。

無限書庫の司書長でなのは幼馴染。

それゆえ、ユーノの事をヴィヴィオは知っていた。
実際、あまり話をした事は無いが。

「実はね、ヴィヴィオと一緒に遊びたくて来たんだ」

「ヴィヴィオと？」

「うん、その、ダメかな？」

「……ううん、ヴィヴィオ、ユーノさんと遊ぶ！」

でも、どうして？

凄くうれしかった。そして、なんでこんなに嬉しいんだろう。

なのはやフェイトと遊ぼうって言われると嬉しいけど、目の前のユーノに言われると、何故かもっと嬉しかった。
……なんで？

それに、なんでユーノさんは来たんだろう。
色々思いながら、ユーノの手に引かれてお出かけした。

後からユーノが話した事だが、既になのはには伝えていたようだ。
それを聞いてヴィヴィオはほっとした。

なのはに許可も得ないで、勝手に外に出てしまったため怒られるの
じゃないかと後で気づいた。

あまりにユーノと遊ぶ事が嬉しかったため……だとヴィヴィオは思
う。

「ねえねえユーノさん、どこに行くの？」

「そうだなあ……、ヴィヴィオはどこへ行きたい？」

「えっと、ヴィヴィオは……」

どこでもよかった、ユーノといっしょなら。

「そうだ。ヴィヴィオ、なのはママが住んだところって行った事
ある？」

「地球？ うん、あるよ」

「そこはどう？」

「うん！ヴィヴィオ、行きたかったの！」

「じゃあ決まり。行こうか」

海鳴には、ヴィヴィオはなのはに連れられて二回ほど行った事があった。

二回とも理由は、なのはの家族に会うため。

長期休暇で里帰りという、よくある理由だった。

海が綺麗なところや、なのはの故郷という意味もあってか、ヴィヴィオはこの海鳴が大変気に入っていた。

「色々歩いてみよっか」

「うん！」

ヴィヴィオのテンションは最高潮。

スキップも踏むほどで、ユーノも嬉しそうであった。

海沿いの歩道を歩いている時だった。

数十分ほど歩いていたが、流石に子どもであるヴィヴィオはそろそろ疲れを感じていた。

「疲れちゃったの？」

「うん……」

「じゃあ……よいしょっと」

「うわ！」

俗に言う、肩車。

ヴィヴィオは今その状態だった。

ユーノが背負ってくれて、これなら疲れない。ユーノも問題なかった。

「高い高い！」

「これなら大丈夫だね」

「うん！」

傍から見れば、まさに親子だった。

ちょうど反対側の道を通る、男女もそんな事を思っていた。

「仲いい親子なんだなあ」

「みたいだな」

「りょうくんも、いつかああなるのかな？」

「……なるんじゃないね。少なくともお前とずっといつしよにいれば」

ヴィヴィオは、肩車である事を思い出した。
テレビで見た家族。

その中に、娘を肩車する父親のシーンがあり、今自分はそんな状態だった。

——ユーノさんがパパ、かあ。

ユーノとヴィヴィオはやがて夕日の綺麗な海岸のベンチに座っていた。

あの後、色んなところを見て、なのはの両親が経営している喫茶店『翠屋』で昼食を食べて。

ヴィヴィオにとっては、最高の一日だった。

「今日ありがとう、ユーノさん！」

「どういたしまして。ヴィヴィオが楽しんでくれて、僕も良かったよ」

そう言って、しばらく海を眺める二人。

やがて、ユーノが再び口を開く。

「ねえヴィヴィオ。なのはママの事好き？」

「え、うん。大好き！」

「そっか、そうだね。……じゃあ、もしも——」

「もしも？」

ヴィヴィオが可愛らしく首をかしげる。

「ヴィヴィオとなのはママと、僕の三人で暮らすってなったら、ヴィヴィオどうする？」

「なのはママとユーノさんとヴィヴィオで？」

嬉しい。

楽しそう。

そうしたい。

今すぐそう言いたかった。

けど、ヴィヴィオは違う質問をする。

「なんで、そんな事聞くの？」

「……僕ね、ヴィヴィオのパパになりたいんだ」

「え？」

「なのはママの事も好きで、ヴィヴィオの事も好き。だから、いっしょに暮らしたい」

「……」

「ダメ、かな？ やっぱり」

「……うん。そんな事ないよ」

「え?」

「ユーノさんがパパになってくれたら、ヴィヴィオすっごく嬉しい!」

「……ふふ、僕も嬉しいよ。そう言ってもらえて」

「えっと、じゃあ……これからは、ユーノパパって呼んでいい?」

「うん、もちろんだよ」

「えへへ、ユーノパパだ〜いすき!」

そう言って、ユーノに抱きつくヴィヴィオ。

ユーノも笑いながら、ヴィヴィオの背中に手を回した。

この後、後にヴィヴィオの名前は『ヴィヴィオ・スクライア』へと
変わることとなるのであった。

更にお姉ちゃんになる事も後の話である。

(後書き)

伝説

「駄文」

ユーノ

「すいませんでした……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0849v/>

あなたのパパ、わたしのパパ

2011年10月7日10時09分発行